血液培養より *Capnocytophaga canimorsus* が検出された一例

◎塩士 菜緒子[1)]、山田 優羽[1)]、紺谷 優理奈[1)]
白山石川医療企業団 公立松任石川中央病院[1)]

【はじめに】*Capnocytophaga canimorsus* はイヌ・ネコの口腔内に常在するグラム陰性桿菌である。*C. canimorsus* による咬傷・掻傷感染症はヒトに敗血症を惹起する事があり、その致死率は約 30%と高い。今回我々は、血液培養検査から *C. canimorsus* を検出した症例を経験したので報告する。

【症例】70 代男性。入院 4 日前に悪寒戦慄・発熱あり、入院 3 日前に左胸部に皮疹が出現し近医受診、帯状庖疹と診断された。入院 2 日前に飼い犬に右手を噛まれた。その後、下痢・嘔吐が出現し、入院当日に近医を受診、炎症反応高値、血小板減少を認め当院に救急搬送された。診察時に右手掌に咬傷と思われる傷跡があったが発赤腫張や圧痛は認めなかった。血液検査では WBC 12,320/μL、PLT 5,000/μL、D ダイマー 1.8μg/mL、CRP 44.20mg/dL、PCT 60.70ng/mL であり、敗血症性ショックと診断され入院加療となった。

【微生物学的検査】入院時に採取した血液培養は、嫌気ボトル（約 13 時間後）、好気ボトル（約 20 時間後）2 セット共に陽性となった。グラム染色で紡錘状のグラム陰性桿菌を認め、イヌとの接触歴から *Capnocytophaga* 属菌が疑われる旨を主治医へ報告した。サブカルチャーでは 37℃、5%CO_2 環境下での血液寒天培地、チョコレート寒天培地で、約 48 時間後にカタラーゼ陽性、オキシダーゼ陽性の微小集落を認めた。同定検査は ID テスト･HN-20 ラピッド（日水製薬）を使用し *C. canimorsus* と同定された。また、外部委託先での質量分析、国立感染症研究所での 16S rRNA 遺伝子解析共に *C. canimorsus* と確認された。

【経過】MEPM 投与を開始し、血小板輸血、エンドトキシン吸着療法を施行。その後 CTRX へ de-escalation され、症状軽快し第 32 病日に退院となった。

【考察】本症例では入院時に右手掌に咬傷を認めたものの既に治癒傾向であったため、入院当初はフォーカス不明の敗血症性ショックとして治療開始となった。当院は質量分析装置を保有しておらず短時間での菌種同定は困難であるが、血液培養陽性時のグラム染色での菌の形態・臨床症状・患者背景から迅速に推定菌の報告を行ったことで、診断や治療に対して有益な情報となった。

連絡先：076-275-2222（内線 2237）